

## 朝鮮総督府の牛痘政策と朝鮮人の反応

朴 潤 裁

### はじめに

「耳にするだけでも恐ろしい天然痘」。1930年代中頃、植民地朝鮮のある言論は痘瘡をこのように表現した。言葉だけでも恐怖感を抱かせる疾病が天然痘——痘瘡であった。痘瘡は伝染力が強い上に、致死率も高かった。仮に命が助かったとしても顔には痘瘡の跡が残る疾病であった。美しい女性が痘瘡にかかり一生を日陰者として暮らすことも珍しいことではなかった。

ところが、1796年にイギリスの医師ジェンナーによって牛痘法が発見されると状況は一変した。牛痘接種によって痘瘡の予防が可能になったからだ。牛痘に対する信頼は絶大だった。牛痘は「完全な予防法」と見なされた。日本が世界に誇る細菌学者も「種痘に依る予防法は全く無害とも言っていゝ位で、効力は確實である」と評価した<sup>1</sup>。牛痘は人類にとって文字通り祝福すべき賜物であった。

だが、牛痘法が全世界に拡散していった19世紀は帝国主義の時代でもあった。支配者にとって牛痘は魅力的であった。侵略と支配の過程において、牛痘を実施することで植民地の抵抗を鈍化させることができたからだ。牛痘は人類が今まで行ってきたどんな防疫策よりも安全で効果的であった。アジアで唯一の帝国主義国家として成長を遂げていた日本も例外ではなかった。日帝は朝鮮に進出するその初期から牛痘法を用いた。その効果は確実に、本格的な植民地支配が始まっても牛痘法は主要な医療政策として機能した。

本稿の目的は、朝鮮総督府が実施した牛痘政策の内容を検討しつつ、朝鮮人がその政策にどのように反応したのかを探ることである。いかに効果的な予防や治療法といえども人々が馴染みのない施術に反感を抱くのは自然なことであった。さらに、朝鮮人にとって牛痘法は、ただ馴染みのない施術というだけでなく、植民国家が実施する政策という点でも特別であった。日本人が朝鮮人を撲滅するために牛痘という「毒物」を注射するという風説さえも起こるほどだった。

ところが、当時、国際的に見て最も優れた予防法だったので、牛痘法は単純な拒否対象にはならなかった。朝鮮人は総督府が施行する強制接種を受容するようになったのである。しかし、総督府は痘瘡の絶滅を確信したが、植民地支配の末期に至るまで痘瘡は終息しなかった。これは、19世紀の主な伝染病であったコレラが1920年代以後、ほぼ終息状態に

1 志賀潔「痘瘡の伝染と朝鮮の伝染病に就て」（『朝鮮及満洲』184、1923）63頁。